

〔釈文〕

雨に八困り口 野じゆく

しばらくのそとね

市中三疊 自作

(東) 医

(南) 蛮骨

(接) 外科日々発

(行) 地震出火の

(その) 間にけが

(を) なさど

(るも) の

(あら) ん

(や)

(数)

(限) り

(な) き

(仲) の

(吉) 原が

(随) 市川つぶ

(れ) し家の荒

(事) に忽火事に

(大) 太刀ハ強くあたりし

(地) しんの筋限日本堤の

(わ) れさきと転びつ起つかけ

(多) ぼしきやつくと騒ぐ猿若町

(芝) 居の焼も去年と二度、重ね鶴菱

(又) 灰を柿の素袍ハ何れも様なんと

(早) ひじやムリませぬか、実に今度の大

(変) ハ嘘じやござらぬ 本所深川咄ハ築地芝

(山) の手丸の内から小川町見渡す焼場の赤ツつら

(太刀下ならぬ) 梁下に再び鋪れぬ其為に罷り出たる 某

ハ

鹿島太神宮の

御内にて磐石

太郎 礎 けふ

手始めに

鯨をバ

要石に

て押へし上ハ

五重の

塔の九

輪ハお

ろか一厘

たり共

動かさ

ぬ、誰

だと思

ア、つがも

内證の

立退芸

者の爛酒

焼たつづれ

た其中で

色の世かいの繁

昌ハ、動かぬ御代の

御恵ありが太鼓に鉦

の音、絶ぬ二日の大せが

きホ、つらなつて坊主